



Data	2023-127
監督: 孔大山 (コン・ダーシャン)	
脚本: 孔大山 (コン・ダーシャン)	
／王一通 (ワン・イートン)	
エグゼクティブ・プロデューサー:	
王紅衛 (ワン・ホンウェイ)	
／郭帆 (グオ・ファン)	
出演: 楊皓宇 (ヤン・ハオユー) /	
艾麗婭 (アイ・リーヤー) /	
王一通 (ワン・イートン) /	
蔣奇明 (ジャン・チーミン)	
／盛晨晨 (シヨン・チェンチ エン)	

みどころ

1990 年生まれの孔大山 (コン・ダーシャン) 監督が北京電影学院の卒業制作として企画した本作が、2 人の支援者のおかげもあって大評判に。各種映画祭での受賞を経て、大阪のシネ・リーブル梅田でも公開されることに。

中国では改革開放政策が推進された 1980 年代に、空前の「SF ブーム」が起き、雑誌『飛碟探索』が飛ぶように売れたそう。しかし、それから 30 年後の今は？

『西遊記』では、三蔵法師たちは仏教の経典を持ち帰るために天竺 (インド) に赴いたが、タン編集長は UF0 や宇宙人に関する情報の調査のため、中国西南部の奥深くへ旅立つことに。その「苦難の道のり」は？「スズメの訪れを待つ少年」との遭遇は？そして「終わりなき道」は？

トランプ大統領の登場以降、“フェイクニュース” が世界的な問題になったが、中国語の「一本正经的胡说八道」とは？そしてまた、フェイクドキュメンタリーとは？突拍子もないことを真剣に語った、本作のような映画のバカバカしさ＝面白さに注目！本作の問題提起をしっかりと考えたい。

■北京電影学院の卒業制作が大ヒット！そのバックには？■

本作は、もともと、1990 年生まれの孔大山 (コン・ダーシャン) 監督が北京電影学院の卒業制作として企画したもの。それを北京電影学院教授の王紅衛 (ワン・ホンウェイ) と SF 小説『三体』を映画化して大ヒットさせた『流転の地球』(19 年) の郭帆 (グオ・ファン) 監督の 2 人がサポートし、エグゼクティブ・プロデューサーとして名を連ねたプロジェクトを 2019 年にスタートさせると、急に世間の注目を集めることに。

さらに、コロナ禍もあって、その脚本に 2 年もかけたうえ、出演者に唐志軍 (タン・ジ

ージュン）役として実力派の楊皓宇（ヤン・ハオユー）を、パート編集部員・秦彩蓉（チン・ツァイロン）役として有名女優の艾麗婭（アイ・リーヤー）の出演を取り付け、80名ものクルーを編成して、人里離れた中国西南地方でロケを敢行！その結果、平遥国際映画祭で最優秀作品賞、青年審査員荣誉賞、映画ファン荣誉賞をトリプル受賞、さらに、北京国際映画祭、香港国際映画祭等の映画祭で話題を呼んだ後、大阪のシネ・リーブル梅田でも公開されることに。

■□■ “実験電影” 学院賞の受賞式に出席 ■□■

北京電影学院は中国が誇る素晴らしい映画大学（大学院）だが、縁あって私は北京電影学院“実験電影”学院賞を主催したことがある。それを『がんばったで！45年』（19、20頁）から引用すれば、次の通りだ。

2. 北京電影学院“実験電影”学院賞の授賞式（2015年6月28日・29日） （事務所だより第26号・2016新年号より）

私のはじめての北京旅行（ツアー旅行）は03年11月。北京電影学院での特別講義『坂和的中国電影論』は07年10月だ。そして、14年7月に、劉旭光教授、劉曉清教授、霍廷霄教授らが来阪した際、坂和を主席スポンサーとする北京電影学院“実験電影”学院賞を発足させることが決定し、15年6月29日、私は評審委員会主席（審査委員会委員長）としてその授賞式に出席した。

<1日目（6月28日）>

- 1) 北京電影学院到着後、劉旭光教授たちに挨拶
- 2) 「北京電影学院“実験電影”学院奖获奖影片放映暨颁奖典礼」を告知する巨大な立て看板にビックリ
- 3) 坂和を歓迎する北京蒙古往事特色餐厅の夕食会に出席。数々のモンゴル式儀式的洗礼を受けた。

<2日目（6月29日）>

- 1) 学院長室での学院長との対談後、音響棟、アニメ棟、俳優棟を見学
- 2) 18時半から、「北京電影学院“実験電影”学院奖获奖影片放映暨颁奖典礼」が開始
- 3) 組委會主席・王鴻海副学院長から坂和の紹介後
評審委員会主席の特頒此証の授与
王鴻海副学院長の自筆の書の授与



評審委員会主席の名札

- 4) 委員会主席坂和の講話
- 5) “実験電影” 学院奨大奨受賞者に、王鴻海と坂和から賞状と 1 万円の授与
- 6) 授賞式参加者全員で集合写真
- 7) 後海の烤肉季での夕食会で集合写真

＜授賞式でのスピーチは次のとおり＞

授賞式スピーチ 2015. 6. 29 (月) 北京電影学院にて

弁護士兼映画評論家 坂和章平

1) 皆さん、こんばんは。私は日本からやってきた坂和章平です。1949 年 1 月生まれの私は今年 66 歳です。私は、2007 年 10 月 10 日にここ北京電影学院で「私の中国映画論」と題する講演を行いました。その時の聴講生の 1 人が北京電影学院を卒業して早稲田大学に入学し、今年同大学の博士号を取得した劉茜懿（リュウ・チェンイ）さんです。その劉茜懿さんと北京電影学院の教授であるお父様の劉旭光（リュウ・シューグアン）さんたち御一行が昨年 7 月に日本の大阪にある事務所と自宅を訪問してくれた際、私が北京電影学院“実験電影”学院賞のスポンサーになることが話し合われ、今年それが実現することになりました。本当に人間の縁とは不思議なものだと思うとともに、こんなかたちで私なりの日中友好活動が深められることを嬉しく思っています。

2) 私は子供の頃から大の映画好きでした。それが高じて、2001 年に事務所を自社ビルに移転しホームページを開設すると同時に趣味のページをつくりました。そして以降、弁護士兼映画評論家として年間 250～300 本の映画を観て、そのすべての評論を書き続けています。『SHOW-HEY シネマルーム』と題するその映画評論本は、ここ 15 年間で 35 冊になりました。とりわけ中国映画が大好きでその鑑賞数は 250 本を超えています。

3) そんな私にとって、本日こんな立派な会場で、こんな栄えある北京電影学院“実験電影”学院賞の授賞式に出席しご挨拶できることは本当に光栄です。劉茜懿さんとお父様の劉旭光教授、さらには副学院長の王鴻海（ワン・ホンハイ）教授や霍延霄（フォー・ティンシャオ）教授、劉曉清（リュウ・シャオチン）教授、敖日力格（アオリゴ）教授たちに心からお礼申し上げます。今回の作品はそれぞれ優秀な作品ばかりでした。本日の授賞式が充実した意義あるものになることを期待しています。本日は本当にありがとうございました。

■□■タイトルの意味は？英題は？監督の問題意識は？■□■

本作の邦題は『宇宙探索編集部』だが、原題も『宇宙探索編輯部』だから、ほとんど同じ。このタイトルは、本作の主人公であるタンが編集長をしている中国の SF 雑誌『宇宙探索』の名前そのものだが、パンフレットによると、そのモデルは 1980 年代に中国で大ヒットした UFO 雑誌『飛碟探索』だ。

中国では改革開放政策が推進された 1980 年代に空前の宇宙ブームが起き、宇宙の気と感応するために頭に鍋をかぶる“気功者”も多くいたらしい。本作後半から、もう 1 人の主役として登場する孫一通（スン・イートン）（王一通／ワン・イートン）のスタイルはまさ

にそれだ。また、本作の冒頭には、『宇宙探索』の編集部員だった若き日のタンが登場するが、それから30年後の今、タンは編集長に出世しているものの、雑誌『宇宙探索』は廃刊の危機に瀕しているらしい。

他方、本作の英題は『Journey to the West』。これは日本で有名な『西遊記』のことだ。夏目雅子が三蔵法師役で、マチャアキこと堺正章が孫悟空役を演じた80年代のTVドラマ『西遊記』は大ヒットしたが、これは中国でも大人気だったらしい。そんな原題と英題を考えると、タンは三蔵法師、スンは孫悟空のイメージ・・・？

■□■「第1章 UFOを追う人」■□■

本作は1章から最終章まで計5章の章立てにされており、その第1章が「UFOを追う人」だ。タイトルをただで、これが『宇宙探索』編集長のタンだということがわかるが、本作では、序章としてタンが編集部自慢の30年前の宇宙服を着たところ、脱げなくなってしまい、救急車を呼ぶ大騒動が描かれるので、それに注目！そんな『宇宙探索』編集部はいつ倒産してもおかしくないはずだが、タンは今でも「地球外生命体は必ずいる」と信じていたらしい。

「第1章 UFOを追う人」の冒頭には、「テレビの砂嵐は宇宙からの信号」と信じるタンの確信に満ちた奇妙な主張が提示される。それは、ある日起きたテレビの故障は、何か重大な出来事が起こったせいだ、というものだ。そこで、タンが調べてみると、まず、オリオン座のペテルギウスに異常が見られる、とヨーロッパの天文台が発表していた。次に、中国西部の村で宇宙人の仕業と思われる不思議な現象が起きていた。それは、石の獅子像の口の中にあった玉が消えた、というものだ。

この、①TVの故障、②ペテルギウスの異常、そして③消えた石の玉の3つには関係がある。そう確信したタンは、『宇宙探索』創刊時からの夢をかけて調査の旅に出ることに。『西遊記』の三蔵法師は仏教の経典を持ち帰るために天竺（インド）に赴いたが、タンは上記の調査のために中国の遥か西南の地に赴いたわけだ。

■□■「苦難の道のり」後、「スズメの訪れを待つ少年」と遭遇■□■

「第1章 UFOを追う人」に続く、「第2章 苦難の道のり」では、まず、「タン様御一行」が、石の玉について投稿した「宇宙大使館」を名乗る男シャオと出会うストーリーが描かれ、それに続いて描かれるのは、石の玉が消えた鳥焼窩村に辿り着く一行の姿だ。同村の村人たちは皆、①獅子像の石の玉が消えたこと、②そこに光る人が現れたこと、を証言し、さらに③村では一頭のロバも消えたと言明したが、その真偽は？

続いて、タン様御一行が獅子像の置かれた家を探し当てると、その家の主人は死んでいたが、頭に鍋をかぶり、不思議な詩を口ずさむスン・イートンという名前の息子と出会うことに。彼は歩いてきたかと思うと、いきなりバタリと倒れる奇妙な行動をとっていたため、タンがガイガー・カウンターで調べてみると、スンの頭の部分が強く反応！これは頭にかぶっている鍋が宇宙からの信号を受信しているに違いない。

これらのストーリーは『西遊記』で見た苦難の道のりとも共通点があるが、どちらかというと『ドン・キホーテ』の旅の方が近い。それはともかく、「第2章 苦難の道のり」の最後にスンがタンに打ち明けたのは、＜正体不明の地球外生命体が「石の玉を取り返せ」と信号を発していること。そして、それを探るために出発する時は、獅子像にスズメが群がる時だ＞ということだ。そして、ついに、今世紀最長の皆既日食の日に、獅子像をすべて隠すほどのスズメが群がったため、タンはスンと共に「第4章 西南地方の奥深く」に進んでいくことに。

■□■旅の仲間は？その結束力は？■□■

イギリス発の人気シリーズが『ロード・オブ・ザ・リング／旅の仲間』（01年）（『シネマ1』29頁）、『ロード・オブ・ザ・リング／二つの塔』（02年）（『シネマ2』54頁）、『ロード・オブ・ザ・リング／王の帰還』（03年）（『シネマ4』44頁）の3部作だった同作に見る“旅の仲間たち”のキャラは興味深かったが、本作に登場する次の3人の“旅の仲間たち”のキャラも興味深い。それは、すなわち、①タンに文句を言い続けながら同行する秦彩蓉（チン・ツァイロン）（艾麗婭／アイ・リーヤー）、②気象観測所で働く酒に目がない那日蘇（ナリス）（蔣奇明／ジャン・チーミン）、そして③『宇宙探索』の大ファンだというボランティアの陳曉曉（チェン・シャオシャオ）（盛晨晨／ション・チェンチェン）の3人だ。

私が最初に中国人の留学生と知り合いになったのは2001年。以降、20年余りの間に多くの中国人と親しくなったが、対日本人比較として最も強く感じるのは、一様に、また良くも悪くも、彼らの自己主張の強さ、逆に言えば日本人の同調思考の強さだ。

そんな視点で3人の「旅の仲間」を見ると、単に『宇宙探索』編集部の大ファンというだけで、こんな「苦難の道のり」にボランティアとして参加したシャオシャオが中国人気質なら、旅の途中、常に文句を言い続けるチンも中国人気質だ。また、「タンたち御一行様」は本作第4章で西南地方の奥深くの、人影もない森の中の溪谷に立ち入るが、そんな場所まで、婚礼用の写真撮影にやってくる新婚夫婦や撮影隊も中国人気質だ。

そんな私の感想はともかく、本作のストーリーとしては、そんな新婚夫婦一行にタンらが帰る道を説明している間に、突如スンの姿が消えてしまったから、アレレ？さらに、焦ってスンを探している最中に、チンが野犬に腕をガブリと噛まれてしまったから、更にアレレ。これにて、タンに対する忠誠心が砕かれてしまったチンは、遂に旅の終わりを決意することに。すると、『宇宙探索』の編集部で30年間ずっと仕事を続けてきたタンを、その良い時も悪い時も支え続けてきたチンの脱落によって、ついに地球外生命体を探し求める編集部の旅もジ・エンド。そして、「宇宙探索」編集部も解散！？誰もがそう思ったが、いやいや、現実は何？そして、タン不屈の魂は？

■□■一本正经的胡説八道！フェイクドキュメンタリーとは？■□■

コン・ダーシャンは監督インタビューの中で、ある村の住民が「宇宙人を捕まえたので、

皆さん、ぜひ僕のところに取材に来てください」という興味深いニュースを聞いたことが本作のきっかけになったと述べている。また、突拍子もないことを真剣に語るギャップに惹かれたこと、それを中国語では、「一本正経的胡説八道」ということを述べている。私は近時、『クエンティン・タランティーノ 映画に愛された男』（19年）（『シネマ 53』89頁）、『ジャン＝リュック・ゴダール 反逆の映画作家』（22年）（『シネマ 53』131頁）、『ヒッチコックの映画術』（22年）という3本の映画監督のドキュメンタリー作品を立て続けに見たが、同じドキュメンタリー映画であっても、その作り方はそれぞれ違っていた。またコン・ダーシャン監督の言葉によると、『ブレア・ウィッチ・プロジェクト』（99年）や『パラノーマル・アクティビティ』（07年）のようなホラー映画は本当に起きたことを撮っているのだと観客に信じさせたいというスタンスの作品」だが、「僕はそれとは違い、もっと不条理感とユーモアのある物語にしたかったんです。」と語っている。

そんな映画を、別の言い方では“フェイクドキュメンタリー”と呼ぶそうだが、なるほど、なるほど。ちなみに、ドン・キホーテは日本人にもおなじみの物語（おとぎ話）だが、本作では、タンが1人で向かった「最終章 終わりになき道」の中で、スンが語っていた1頭のロバを発見したうえ、タンがそのロバにまたがって疾走するシークエンスが描かれる。そんなシーンが現実起きるはずはないから、まさにこれこそ「フェイクドキュメンタリー」の象徴だ。ちなみに、米英がイラク戦争に踏み切った理由は、「イラクが大量破壊兵器を持っていること」だったが、後にこれがフェイクであることが明らかになった。また、2016年のトランプ大統領の登場によって“フェイクニュース”という言葉が世界中に広まった。そして、2022年2月24日に始まったロシアによるウクライナ侵攻や、2023年10月7日に始まったガザ地区を実行支配するハマスによるイスラエルへのロケット弾の発射、それに対するイスラエルの猛反撃の中で、今や連日双方からのフェイクニュースが飛び交っている。そんな状況下、「これはフェイクドキュメンタリー作品です」と宣言したうえ、「一本正経的胡説八道＝突拍子もないことを真剣に語った」本作のような映画のバカバカしさ＝面白さに注目！

■□■「最終章 終わりになき道」でタンが見たものとは？■□■

私が、「午前十時の映画祭」で2022年3月13日に2度目の『イングリッシュ・ペイシェント』（96年）（『シネマ 1』2頁、『シネマ 50』230頁）を観たのは、同作の素晴らしさを25年間ずっと覚えていたためだ。同作に見る“不倫ドラマ”の展開（？）も興味深かったが、私が強く印象に残ったのは、ラストにかけて展開する、主人公がある洞窟の中で傷ついて動けない美しい人妻と2人だけで過ごす姿だった。なぜそうだったのかは同作の評論をしっかりと読んでもらいたいだが、本作の「最終章 終わりになき道」のラストにも、そんな洞窟が登場するので、それに注目！タンは深い森の中で宇宙船を発見すると、そこでスン・イートンを発見、そして、彼の案内によってある洞窟の中に入ると、謎の絵が描かれた壁画が！これは一体ナニ？

途中で食べた毒キノコのせいで、遠のく意識の中、タンはぼんやりと「本当は石を届けるために来たんだ。元々ここにあった石だから。」というスン・イートンの声を聞くことに。そこで、タンは自死してしまった娘からの最後の問いであった「私たち人類がこの宇宙に存在する意味とは、一体何なのか。」をスン・イートンに質問すると、それに対する彼の答えは「彼らも分からないから、それを人類に聞くために地球に来ているのかも」というものだったから、本作ラストのストーリー展開は何とも意味シンだ。

■□■ 1 ヶ月後。甥の結婚式でのタンのスピーチは？ ■□■

近時の日本の結婚式は芸能人のそれを除いて、少しずつ簡素化されているが、中国の結婚式は、今でもバブル期の日本のそのように、派手な演出が多く費用もかけている。少子化が進み若年層が貧しくなっているにもかかわらず、中国で派手な結婚式が続いているのは、親世代が金持ちだからだ。しかし、不動産不況が続き、経済成長が鈍化している今の状態が続けば、今後の中国の結婚式も日本と同じように簡素化していくだろう。しかし、本作ラストに登場するタンの甥の結婚式はかなり豪華なものだから、それに注目！

そんな晴れやかな席に、いくら叔父に当たるとはいえ、倒産しかかっている会社の編集長のタンを登壇させてスピーチさせるのは如何なもの？そう思っていると案の定、タンは長い沈黙を続けた後、重い口で自分が見た夢の話を開始してから、アレレ。おいおい。それは甥の結婚式の話題ではないだろう。

なぜ、あの辺境の地に宇宙船があり、そこにスン・イートンが現れたの？また、あの洞窟の中に描かれていた壁画は一体何だったの？そして、スン・イートンはなぜ、洞窟の向こうへ飛んでいき、消えてしまったの？あれは夢だったの？それとも現実だったの？タンが甥の結婚式のスピーチで話したのは、そんな「夢の話」だったが、そこでタンが結婚式の参加者全員に向かって問いかけたのは、自死した娘が自分に質問し、自分もスン・イートンに質問をした、あの質問。つまり、「宇宙がなぜ存在し、人類がなぜ存在するのか？」、というものだった。しかして、タンのそんなスピーチは、ウケたの？

さらに、本作ラストでは、『宇宙探索』編集部が解散した後、いつもの精神病院でのチャリティーイベントの場面になる。そこでは、タンが奇妙な詩を愛する男だったスン・イートンと同じように、亡くなった娘に捧げる詩を読み上げており、旅の仲間たちが家族のようにその姿を見守っていたが、このラストは一体何を意味するの？本作鑑賞後、すべての観客は自分の胸に手を当てながら、それをじっくり考えたい。

2023（令和5）年10月31日記